

「第100号、そして教師の立ち位置について」 県教育庁教育次長 久保田範夫

1 うつくしま教育通信100号にちなんで

今夏も、35度を超える猛暑日が8月お盆過ぎから続き、9月になってもなかなか秋が近づいてきませんでした。しかし、「～夏果てて、秋の来るにはあらず。春はやがて夏の気を催し、夏より既に秋は通ひ、～」と「徒然草」にあるように、喧(かまびす)しい蝉の鳴き声に混じって、幽かにではあっても、虫の声を聴くことができるようになり、最近では鈴虫が大合唱しています。

旧暦9月の異称「長月」の由来については、雨が多く降る時季のため「長雨月(ながめつき)」から「長月」になったとする説もあるようですが、「夜長月(よながつき)」の略であるとする説が最も有力です。次第に長くなりつつある秋の夜、区切りとなる第100号に何を書いたらいいかぼんやり考える中、原点の第1号に帰ってみました。

教育通信の記念すべき第1号は、8年前の平成16(2004)年6月21日に発刊、今回改めて富田孝志元教育長のメッセージ「日常のひとときにこそ」を読み直しました。(全文は、県教委のホームページで読めるので、是非御一読を。)

「金木犀の香りが漂う晴れた秋の日」に、母子が散歩している微笑ましい光景。が、よく見ると、母親はウォークマンを聞きながら4歳くらいの男の子の手を引いて歩いていただけ。富田元教育長は「お母さんの豊かな愛情を伝える場は日常生活のさり気ないひとときにこそあるのではないかと述べていますが、それは学校教育も同じではないかとの思いを私は抱きました。私たち教師は、「教室の授業、学年集会」で、子どもたちに「教える、指導する」というように、つつい構えてしまうことが多いのではないかと。それよりも、校門近くでの朝の挨拶、廊下で交わす子どもとの何気ない会話や職員室での教師同士の会話等々、まさに学校という日常の中の「さり気ないひととき」に、子どもたちは多くのことを感じ、そして学ぶのではないかと。よく「学校の教育活動全体を通じて」と言うが、必ずしも「教育活動」とは意識していない、教師の何気ない言葉や立ち居振る舞いが、子どもたちにとって非常に大きな意味を持つのだと思います。

余談ですが、平成16(2004)年は、自然災害が多かった年ようです。7月には、新潟・福島豪雨、9月には、浅間山の噴火、紀伊半島南東沖地震(震度5弱)、10月には、新潟県中越地震(震度7×1回、震度6強と震度6弱×各2回)、12月には、スマトラ島沖地震(M9.3)で日本人30人以上死亡、さらに、東日本は記録破りの猛暑(東京大手町39.5℃など)で、戦後最も年間平均気温の高い年でした(ちなみに、平成22年＝2010年は第4位)。また、過去最多の台風10個が上陸したのもこの年です。

2 教師の立ち位置について

今年度、4月と6月に免職各1件、8月には中学校と高等学校の教諭が相次いで逮捕される事態。何としても不祥事は零にしない、との思いを強くしていますが、近々、杉教育長からメッセージを届ける予定なので、今回は少し視点を変えて。

私自身は、年度の変わり目などに、自分の立ち位置・ポジションについて思いをめぐらすことがあります。「なぜ、私はここにいいのか。なぜ、ここにるのが私なのか。」ふと自問し、明確な答えが見出せないときもあり、その答えを探し続けることが生きる

ことなのかも知れません。そのような時、一つの手がかりとして、私が毎年読み返している詩があるので紹介します。（東日本大震災から約2か月後、県立学校長会議の場でも紹介しました。）

或る位置	吉野 弘
樹の位置――それは 偶然が決めたものだろう。	樹から答は返ってこない。 過ぎた歳月を すべて樹形で語り 来歴の総量だけで立ち それ以外を語らない樹。
樹高、幹周り、枝の張りかた――それは 樹自身が決めたものだろう。 地上からは見えない根の 緻密な土の抱きかたも。	（剛直で気むづかしい幹、しかし梢では 風や光と遊ぶ賑やかな葉のきらめき）
或る位置に 同意したのではない。	――反歌 枝を伸べ根を深めつつ己が位置 うべないゆくや樹々の明け暮れ
同意するより先に、 浅い根はまず土を掴まねばならなかった。	「陽を浴びて」（花神社） 「続続・吉野弘詩集」（現代詩文庫） 「吉野弘詩集」（ハルキ文庫）所収
その樹に私は尋ねる。 偶然が決めた君の位置を 君はどのように受け入れたか？	

偶然を引き受けて、種子が落ちたその場で生長する樹木。人が、ある民族のある家族の一員として生を受けることも偶然。私たちはその偶然を強いられた宿命としてではなく、必要に変えなければならないのだろう。人はそのための内面的葛藤や相克を経験するし、樹木もまた枝を伸ばし根を張りながら（観賞用の植木として変則的な成長を強いられたり、崖っぶちの石の間に根を張らなければならない木もあるだろう）、ある歳月をかけて自分の位置を諾（うべな）うための努力を重ねる明け暮れがある。

「過ぎた歳月を／すべて樹形で語り／来歴の総量だけで立ち／それ以外を語らない樹」、人間もこのように生きることができたら、或いは死の直前にはこのような境地になれるのかなあ等々、様々なことを考えさせてくれる詩です。

「ここは自分が本来いる場所ではない」という教職員の言葉を時折聞きます。自分の立ち位置をしっかりと定められないと、校務に影響が出たり、場合によっては不祥事につながる可能性があるし、そうならなくても、何よりも子どもたちにとって良いことではない。立ち位置が揺れている教師の「さり気ないひととき」の言動が、子どもたちに良い影響を与えるはずはないのです。違う場所で己の力を発揮したいという思いは、完全には消せないかも知れないが、そこは心の持ちよう。私自身は、教師にとってゴールは無く、どこまで行っても中継点と考えているのだが、一つの考え方として「今いる場所は次へつながる重要な中継点」ととらえ、「まずはその場所でしっかりと勤めよう」と考えることが大切なのではないか。

いずれにせよ、日常の何気ない言動の重さを実感し、自らの立ち位置をしっかりと定め

ること、そのことが教師の使命感、誇りを揺るぎないものとし、不祥事とは全く無縁なところで、福島復興を推し進める力になると考えています。

◎教育長メッセージ ～日々の思い～

「日常のひとつにこそ」

県教育委員会教育長 富田 孝志

金木犀の香りが漂う晴れた秋の日の昼下がりに、福島市内の出来事。前方から若いお母さんが4歳くらいの男の子の手を引いて歩いてきました。このような気持ちの良い日に親子で散歩、微笑ましく思いながら私は近づいていきました。近づいて驚きました。そのお母さんはウォークマンのヘッドフォンを耳にして男の子に話し掛けるでもなくただ男の子の手を引いて歩いていただけでした。男の子も黙って手を引かれていただけだったのです。このような素晴らしいひとときを。勿体ない。思わず考えてしまいました。あるいは私の思い過ごしだったのかもしれませんが、しかし、お母さんの豊かな愛情を伝える場は日常生活のさり気ないひとときにこそあるのではないかと考えさせられた出来事でした。

今月から始まります。『うつくしま教育通信』をよろしくお願いいたします。

旧暦9月～長月の由来については、「夜長月（よながつき）」の略であるとする説が最も有力ですが、他に、雨が多く降る時季のため「長雨月（ながめつき）」から「長月」になったとする説もあるようです。また、9月には、寢覚月（ねざめつき）、色どり月、菊開月（きくさきつき）等の別名もあります。